

動詞句修飾の副詞の生起位置と解釈について

On the Position and Interpretation of VP Adverbs

西村 知修

Tomomichi NISHIMURA

1. はじめに*

本稿は動詞句修飾の副詞の生起位置とその解釈についての考察を行う。動詞句修飾の副詞の生起位置に関して、なぜ動詞の後ろにしか生じないものと、動詞の前後の両方に生じるものがあるのだろうか。後ろにしか生じないものと前後の両方に生じるものの中には、何かしらの意味の明確な違いがあるのだろうか。本稿ではまず2節において先行研究を概観し、副詞研究の二大潮流と言える指定辞分析と付加分析について概略を述べる。その後、動詞句修飾の副詞としてどのようなものがあるのか、そしてそれらの副詞がどのように扱われているのか Haumann (2007) を批判的に分析しながら見ていく。3節では、西村 (2016) と同じく加賀 (2001)・Kaga (2007) の意味役割理論と、Travis (2010) の Inner Aspect Phrase を仮定することを述べる。そしてそのような動詞句構造を仮定することで、従来考えられている提案よりも、動詞句修飾の副詞の生起位置と解釈を説明できる可能性があることを述べる。4節ではまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究

2.1. 指定辞分析と付加分析

2.1節では副詞の二大分析と言える指定辞分析と付加分析について概略を述べる¹。

はじめに指定辞分析を概観する。複数の副詞が文中に生起したときに、それらの副詞の順序はかなり厳格に決まっていると考えられている。そのことはすでに Jackendoff (1972) でも指摘されている。

- (1) a. *Probably*, Max *carefully* was climbing the walls of the garden.
 b. **Carefully*, Max *probably* was climbing the walls of the garden.

(Jackendoff (1972 : 89))

また Nakajima (1982) においても、次のような話者指向副詞の共起制限の例が挙げられている。

* 本論文は西村 (2016) の分析をもとに2016年10月に開催された日本英文学会九州支部第69回支部大会での口頭発表を加筆・修正したものである。コメントをくださった先生方に感謝申し上げます。なお本論文の不備はすべて著者に帰するものである。

¹ 水野 (2010) などではフェイズに基づいた副詞の認可の分析が行なわれているが本稿では扱わないこととする。

- (2) a. **Fortunately*, he had *surprisingly* had his own opinion of the matter.
 b. **Certainly*, he had *evidently* had his own opinion of the matter.
 c. *Fortunately*, he had *evidently* had his own opinion of the matter.
 d. **Evidently*, he had *fortunately* had his own opinion of thematter.

(Nakajima (1982 : 342))

Nakajima (1982) は、このような生起順序の制約があるのは、話者指向副詞が二種類に分類され、しかもそれぞれの種類の副詞が、異なる統語構造上に基底生成されるからであると提案した。この提案の発展形とも言えるのが Cinque (1999) の分析である。Cinque は主にイタリア語とフランス語の副詞の生起順序を分析し、さらに数10カ国語の副詞の生起順序とも比較することで、副詞の生起順序に普遍性が見られることを指摘した。彼の分析では、副詞の認可は、その副詞を認可することができる機能範疇の主要部との指定辞・主要部の一致によって行なわれる。つまり副詞は認可されるために、その副詞を認可できる機能範疇の指定部位置に基底生成されることになり、副詞の生起順序の普遍性は統語構造上の機能範疇の生起順序の普遍性から導かれることになる。このような Cinque の分析は指定辞分析と呼ばれる。以下が Cinque (1999) で提示されている副詞の生起順序の1例である。

- (3) *frankly* > *fortunately* > *allegedly* > *probably* > *once/then* > *perhap* > *wisely* > *usually* > *already* > *no longer* > *always* > *completely* > *well*

(Cinque (1999 : 34))

ここで問題なのは、ある副詞を認可する機能範疇の位置は統語構造上で一定の位置を占めることになるので、もしそのある副詞が文中の様々な位置に生じるとすれば説明できない点である。実際に次のような例が指定辞分析に対する問題例としてしばしば提出されている。

- (4) (*Wisely*,) they (*wisely*) will (*wisely*) have (*wisely*) declined her invitation.

(Ernst (1998 : 135))

(4) の例の *wisely* は「賢明にも」という意味の主語指向副詞であるが、文中の様々な位置に生じることができることを示しており、指定辞分析にとっては問題となる。また (5) は *wisely* と *frequently* の順序が入れ替わっても意味が変わらない例である。

- (5) a. He *wisely* has *frequently* gone there on Sundays.
 b. He *frequently* has *wisely* gone there on Sunday.

(Haumann (2007 : 63))

厳密に共起順序を定めることになる指定辞分析にとっては、(5) のような例は問題となる。これらの問題の対処として Cinque が述べているのは、副詞の周りの要素が移動している可能性と、1つの同じ意味の副詞に対して2つ以上の生起位置がある可能性である (Cinque1999, 2004など)。

他方、付加分析の代表である Ernst (2002, 2004など) は、Cinque の指定辞分析のように統語的に厳密に副詞を位置づけることはせず、副詞は基本的に自由に付加できるという立場をとる。そして付加操作は統語的にはほとんど制約なく自由に適用されるが、出来上った構造が意味的もしくは音声的な制約に違反することで非文になるという提案を行っている。しかし Haumann (2007) によれば、Ernst の付加分析で

は以下のような例は説明することが難しいという。

(6) a. She has snored *loudly*.

b. *She has *loudly* snored.

(Haumann (2007 : 34))

Haumann によれば、*loudly* は動詞句に対して左右のどちら側にも付加できるので (6b) は適格な文のほ
ずであるという。さらに、Ernst が提案している意味的な制約も、(6b) の例が非文になる理由を説明する
ことができないという。

本稿では、Haumann (2007) による Ernst の付加分析に対する反論を有効と認めつつも、あくまでも付
加分析の立場をとる場合にどのように分析すべきであるのかということに対して、1つの解決策を試み
る。3節では、(6) のような様態副詞の例は、その様態副詞と動詞の意味とをより注意深く考えれば、自
ずと生起する位置が限られることになることを説明していく。その前に、2.2節で動詞句内で生起し得る副
詞の位置を確認しておく。

2.2. 動詞句修飾副詞の分類と生起位置

本稿では動詞句修飾の副詞を扱うこととし、本節では動詞句修飾の副詞としてどのような副詞を想定す
るのかを確認していく。

動詞句を修飾すると考えられる副詞には様態副詞、結果副詞、完結性程度副詞 (degree-of-perfection
adverbs)²が含まれるものと考えられる。これらの副詞のうち、まずは様態副詞について考察する。
Jackendoff (1972) では、様態副詞は動詞の前の助動詞と同じ位置と、動詞句の後ろの位置の2ヶ所が少
なくとも考えられている。そして助動詞の位置では同じ副詞が様態副詞と主語指向副詞のいずれかの解釈
を持ち得ることを指摘している。

(7) John *cleverly* dropped his cup of coffee.

(Jackendoff (1972 : 49))

Jackendoff (1972) の考えでは、(7) の文の *cleverly* は「賢いことに」という主語指向解釈と「賢く・賢
い方法で」という様態解釈があることになる。*cleverly* や *carefully* などの副詞が2つの解釈を持つことは、
次のような文が可能であることから証明される。

(8) Marvin *carefully* sliced all the bagels *carefully*.

(Haumann (2007 : 53))

carefully が2つの解釈を持つからこそ (8) の文は成立する。この文は「注意深いことに、マーヴィンは
すべてのベーグルを注意深く切った」という意味であり、最初の *carefully* が主語指向解釈となり、動詞句
の後ろの *carefully* が様態解釈となる。

しかしこれら *cleverly* や *carefully* という副詞は、主語指向と様態の2種類の解釈のみしか持たないとい
うわけではない。第3の解釈が存在する可能性は、次のような例が可能であるという事実によって示すこ
とができる。

(9) She *cleverly* has been *carefully* answering questions *stupidly*.

(Haumann (2007 : 201))

² 完結性程度副詞は Ernst (2002) の分類に基づいている。

Haumann (2007) によれば、この文の *cleverly* は構造的に助動詞よりも上位にあるため主語指向解釈であり、*stupidly* は動詞句の右側にあるため様態解釈である。よって *carefully* は主語指向解釈でも様態解釈でもないことになり、主語態度副詞 (subject attitude adverb) であるという。つまりこの文は、「賢いことに、彼女は慎重な態度で、質問に愚かな様子で答えている」というような意味になるという。さらに Haumann は、この文のように動詞句のすぐ左側に生起する *carefully* のような様態解釈に見える副詞は、実際には主語指向副詞や主語態度副詞の解釈しかないのだという³。その証拠として Haumann は次のような例を挙げている。

(10) a. She has not been *cleverly* avoiding this topic.

→ She has not been avoiding this topic.

b. She has not been answering the question *cleverly*.

→ She has been answering questions.

(Haumann (2007 : 314))

(10a) の *cleverly* は (9) の *carefully* と同じように動詞の直前に生じているため、Haumann の主張では様態副詞の解釈はできない。もしこの *cleverly* が様態副詞の解釈を持つとすると、(10b) の様態副詞の解釈を持つ *cleverly* と同じように *not* の焦点になるはずである。つまり (10a) の *cleverly* に様態解釈があれば、(10a) は「彼女は賢いやり方ではその話題に答えなかった (が、その話題に答えること自体はした)」という意味になることができるはずであるが、実際にはその解釈は無理なのだという。この (10) のような例から考えると、様態副詞は動詞の前にはそもそも生じることはできず、動詞の後ろ側に生起位置が制限されることになる。

この制限は様態副詞だけでなく、動詞句を修飾する副詞すべてにかかるものとして、以下の (11) の主張へとつながる。

(11) Haumann (2007) の主張

動詞句修飾副詞は動詞の後ろ側に基底生成され、動詞の前には生じない。

Haumann の主張が正しいとすると、(12) のような副詞が動詞句の前にくることができない理由をことさら述べる必要がなくなる。

(12) a. *John *carefully* worded the letter.

b. *The job *handsomely* paid us.

c. *Steve *elegantly* dresses.

d. *She has *loudly* snored.

((a) ~ (c) は Jackendoff (1972 : 68)、(d) は Haumann (2007 : 34))

とくに (12a) ~ (12c) は Jackendoff (1972) 以来、動詞句の後ろ側にしか生じることができず、削除することもできないことから、下位範疇化副詞という特殊な身分を与えられてきた副詞である。しかし Haumann からすれば動詞句の前に生じないというのは当たり前のことであり、(12) の文が非文であるこ

³ ただし受動態においてはこのような制限は生じないが、本稿では立ち入らないことにする。

とに対して何ら特別な理由を述べる必要はなくなる。また、この (12a) ~ (12c) の副詞が削除できないとされる理由は、これらの文が情報価値を持つためにはどうしても副詞が必要であるという談話上の要請によるもので、統語構造上必須の項などとは区別されるものであるという。実際にこれらの副詞は文脈によっては削除されることが指摘されている。

(13) We've figured out the content of all the exam questions, but we haven't worded them yet.

(Ernst (2002 : 273))

よって下位範疇化副詞というものは存在しないことになる。

Haumann の (11) の主張が正しいとすると、動詞句修飾副詞は動詞の後ろ側に限定され、その生起位置の分布が単純かつ明確なものになるのであるが、実際には Haumann の (11) の主張は強すぎると考えられる。主張の反例としては次のような例を挙げるができる。

(14) a. We *gently* rolled the ball down the hill.

b. We rolled the ball *gently* down the hill.

(Radford (1997 : 371))

Radford によれば、(14a) の *gently* は vP 様態副詞で、ボールの転がし方が優しいことを表わし、(14b) の *gently* は VP 様態副詞で、ボールの転がり方が優しいことを表わすという。(14a) の *gently* は動詞の左側に生起しているものの、Radford の説明から考えると明らかに動作主の動作の様態を表わすものである。よって Haumann の (11) の主張は問題がある。3 節において後述するように、vP 様態副詞は動詞句の左側にも右側にも生じることができる。

また次のような例も挙げられる。

(15) John *deliberately* dropped the case.

(鈴木 (2014 : 34))

鈴木によれば、この文の *deliberately* は主語指向解釈もありうるが、様態副詞の解釈もできるのだという。

次のような例も様態副詞が動詞の前に生じている例である。

(16) She *softly* closed the door, then took one of the wooden chairs from the side of the room. (COCA)

この例における *softly* は優しいやり方でドアを閉めるという意味にとるのが自然であり、彼女は優しい態度でドアを閉めたというような、主語態度読みをあえてとるのは、不可能でないにしても自然とは言い難い。また COCA で調査すると、close the door のような文に *softly* が生起する場合は、*softly* の多くが動詞の前に生じることが分かる⁴。よって例えば「(16) の *softly* が談話の要請などによって例外的に動詞の前に生じているだけで、動詞の後ろに様態副詞が限定されるという主張は維持される」として (11) の主張を擁護するのは困難であろう。

⁴ COCA において *softly* と動詞 *close* が共起する数を、*softly* の左右 6 語の範囲で検索したところ、146例が検出された。そこから分詞構文で使われる *closing* や *to* 不定詞補文中の *close* などを除いて目視で確認した結果、*softly close the door* のような語順になっているものは11例、*close the door softly* のような語順は23例であった。参考までに *The door softly closes.* のような語順になっているものは4例、*The door closes softly.* のような語順は21例であった。

さらに以下の例を見ることとする。

(17) John *cleverly* has *carefully* been *gently* throwing the balls into the hole.

Haumann の (11) の主張が正しいとすると、(17) の例は解釈が不可能となるはずである。なぜなら動詞句の左側に生起している *gently* は様態副詞の解釈はできなくなるはずなので、*cleverly*、*carefully*、*gently* の3つの副詞に対して主語指向解釈と主語態度解釈の2種類の解釈しか選択肢がないことになってしまい、必ずどこかで解釈の重複が起こるからである。しかしかしこの例は、*cleverly* が主語指向解釈、*carefully* が主語態度解釈、*gently* が様態解釈で問題なく成立する文である。ここからも Haumann の (11) の主張は問題があるとわかる。

さらに、動詞の前の一見様態副詞に見える副詞は焦点にならないことから様態副詞ではない、という主張も次の例によって覆される。

(18) John has not *gently* rolled the ball down the hill.

この例は「ボールを優しく転がしはしなかった（がボールを転がすこと自体はした）」という意味にとることが可能であり、*gently* は様態副詞の解釈を持つことができる。このような例を考えていくと、Haumann の (11) の主張を維持することは困難となる。

(11) の前提がなくなるとすると、(12) の副詞が動詞の前に生起しない理由を改めて考える必要が出てくることになる。次節では、(12) の副詞が動詞句の後ろにしか生起しない理由を動詞句の構造から考えていく。

その前に、ここで Haumann (2007) の主張に対する反例のように見えるが、必ずしも反例として扱えない可能性がある例について付け加えておく。

(19) a. He wrote the letter *carefully*.

b. He *carefully* wrote the letter.

(岡田 (1985 : 46))

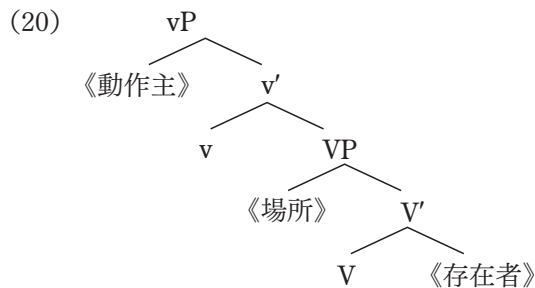
(19) の例文中の *carefully* は動詞の前後どちらに生じていても様態副詞の解釈が可能である。岡田 (1985) によれば (19) の文の違いは談話上の意味の違いであり、(19a) の *carefully* は文の焦点となるのに対して、(19b) は脱焦点化されているという。よって (19a) は How did he write the letter? の答えにすることができるのに対して (19b) はなることができない。(19b) において *carefully* が動詞の前に生起しているので、これは Haumann の (11) の主張の反例となりそうである。しかし談話上の意味の違いがあることを考えると、(19b) の *carefully* はもともとは動詞句の後ろ側に基底生成されていたが、脱焦点化のために、もしくは話題化のために動詞句の左側に移動してきたという可能性がある。動詞句内の上側に TopicP や FocusP などの階層があることは Belletti (2004) などによっても提案され、副詞についても Göbbel (2007) による分析がある。(19b) の副詞は動詞句のさらに上側にあるため、それらの分析をそのまま用いることはできないが、もし似たような仮定を行えば、安易に (19b) が Haumann の (11) の主張の反例であると主張することはできなくなる。しかしそうではあっても、(14) (16) (17) (18) の例は Haumann の (11) の反例であるということに変わりない。なぜなら次節で議論するように、(14) (16) (17) (18) における様態副詞はすべて、vP によって表わされる動作の様態を表わすものと考えられ、そもそも動詞の左側に全く問題なく基底生成されると想定するからである。

3. 動詞句構造と副詞の生起位置の分析

3.1. 動詞句構造と副詞の位置

本節では加賀（2001）・Kaga（2007）の意味役割理論、さらに Travis（2010）の Inner Aspect Phrase を動詞句の基本構造として想定していく。

まず動詞句の構造として本稿が採用する加賀（2001）・Kaga（2007）などの主題関係に基づく VP-shell 構造について概観する。統語部門では併合（Merge）によって文が組み立てられると考えられている。その併合が動詞句内においてどのような順序で行われるのかを、Baker（1988）の主題役付与一様性の仮説（uniformity of theta assignment hypothesis : UTAH）を基にして考える。これは意味役割が統語構造に反映されることを規定したものである。意味役割とは、動詞や形容詞などの述語の意味を成立させるために必須なものであり、意味役割を担う要素は項と呼ばれる。本稿では、加賀（2001）などで提案されている意味役割を組み込んだ次のような VP-shell 構造を考える。



（加賀（2001：127）より一部省略・変更して引用⁵）

(20) によると、動詞句を構築する際にはまず動詞 V と《存在者》の意味役割を担う項が併合し、次に《場所》を担う項が併合する。さらに軽動詞 v が併合し、そこに《動作主》を担う項が併合することで動詞句の基底構造が出来上がる。基底構造では《存在者》、《場所》、《動作主》という順番で意味役割を持った項は併合していくことになる。この基底構造から種々の理由によって移動が生じ、様々な語順の動詞句が生じると考えられる⁶。(20)における《存在者》《場所》《動作主》はマクロな意味役割であり、従来提案されてきた多様な意味役割を3つにまとめたものである。《動作主》には〈動作主〉や〈原因〉が含まれ、《場所》には〈場所〉、〈着点〉、〈起点〉、〈経路〉、〈受益者〉、〈経験者〉、〈被動作者〉が含まれる。《存在者》は従来の〈主題〉であり、移動物、出現するもの、存在するものなどが含まれる。以下に日本語の例を挙げる。

- (21) a. ビルがジョンを批判した。 [ジョン：〈受取手〉]
 b. 徳川軍がこの城を攻撃した。 [この城：〈被動作主〉]
- (22) a. ジョンがこの穴を掘った。 [この穴：〈結果物〉]
 b. 監督者が試験問題を配布した。 [試験問題：〈移動体〉]

⁵ 加賀（2001）は上位の vP を VP1、下位の VP を VP2としている。加賀（2001：154-155）を参照。またマクロな意味役割は加賀に従って《 》で、従来の意味役割は〈 〉で表わすことにする。

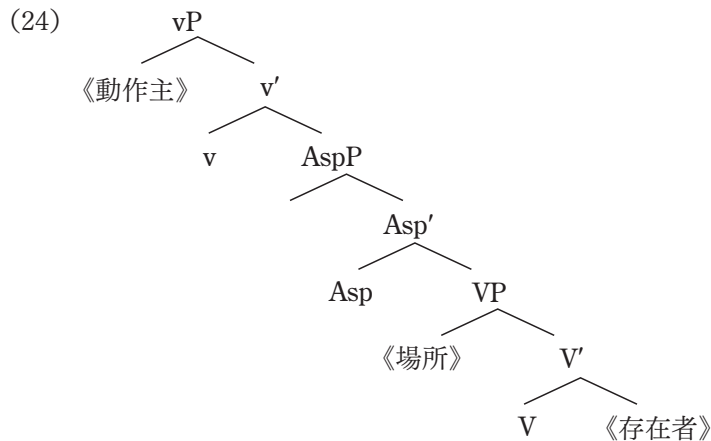
⁶ 移動も併合だとされているが、移動という表現を使うこととする。また現在では移動した後にはコピーが残ると考えられているが、痕跡 t が残るという表記をする。

- (23) a. 議長が開会を宣言した。 [開会：〈移動体〉の一部]
 a'. 議長が（議員に向けて）〈開会の合図〉を発した。
 b. ジョンがフェルマーの定理を証明した。 [定理：〈移動体の一部〉]
 b'. ジョンが（人々に）〈定理の正しさ〉を示した。

(加賀 (2016))

加賀の提案で特徴的なのは、従来〈場所〉の意味役割が与えられてきた人やものの内在的特徴、または一時的状態を表わす叙述形容詞や叙述前置詞を〈主題〉、すなわち《存在者》として扱い、その性質や状態を有する人やものを《場所》として扱う点である。

次に本論文では目的格の照合の仕組みを明確にするために、vP と VP の間に機能範疇 Inner Aspect Phrase (AspP) を想定する Travis (2010) を採用する⁷。AspP は目的格の照合と VP の意味に基づくアスペクト特性の区別を行うものであると Travis は想定している⁸。加賀の VP-shell 構造に Travis の inner aspect phrase を組み込んだ動詞句構造は藤本 (2014) において提案されているものである。この動詞句全体の基底構造は (24) のようになる。AspP の指定部の位置は目的語が格の照合を行うために移動してくる位置である。



加賀は《場所》を表わす項に注目し、次のような原則を提案している。

(25) 構造的具現化原則

単純な《場所》の項は前置詞句 (PP) として具現するのに対し、影響を受けた《場所》は名詞句 (NP) として具現する。

(加賀 (2001 : 144))

加賀によれば、単純な《場所》は《存在者》との単なる物理的な位置関係を表わす場所であり、〈場所〉〈着点〉〈起点〉〈経路〉などである。影響を受けた《場所》は〈所有者〉〈受取手〉〈受益者〉〈経験者〉〈被動作主〉などであり、《存在者》と単なる物理的な場所以上の関係があるものであり、その関係から何らかの影響を受けるものである。加賀は《場所》に関して (25) を提案したが、《存在者》に関する記述を補っ

⁷ 加賀 (2016) では Baker (2015) による依存格の考え方が導入されており、本論文とは異なる仕組みが提案されている。

⁸ Haumann (2007) では動詞句のアスペクト特性の区別を行う機能範疇は TelicP、目的語の照合を行う機能範疇は AgrOP である。

たものが (26) である。

(26) 改訂構造的具現化原則

影響を受けた《場所》、すなわち動詞の表わす行為の影響を受けて状態が変化する《場所》は NP として現れ、そうでなければ PP として現れる。影響を受けた《存在者》、すなわち動詞の表わす行為の影響を受けて位置が変化する《存在者》は NP として現れ、そうでなければ PP として現れる。

(藤本 (2014) より、一部変更して引用)

加賀や藤本によって示された (25) (26) の原則から (27) が導かれる。

(27) 《場所》項が NP として具現している動詞句では、V は「《場所》の状態が変化する」という意味を表わす。《存在者》項が NP として具現している動詞句では、V は「《存在者》が移動する」という意味を表わす。v は VP によって示される事象を《動作主》が「起こす」という意味になる。

(西村 (2016 : 5))

これは結局、動詞句構造を意味的に分解し、v は CAUSE、V は BECOME や GO などの述語成分に分解する概念意味構造とほぼ同じことを述べているわけであるが、(27) は V が BECOME の意味になるときは《場所》が名詞句として具現し、GO の意味になるときは《存在者》が名詞句として具現するということを表わしている。ここで v は CAUSE、V は BECOME (状態変化) や GO (位置変化) を表わすと考えると、《場所》の状態変化や《存在者》の位置変化の様態を表わす副詞は VP (や V') に付加すると仮定するのが自然である。また《動作主》の行為の様態を表わす副詞は vP (や v') に付加すると仮定するのが自然である。

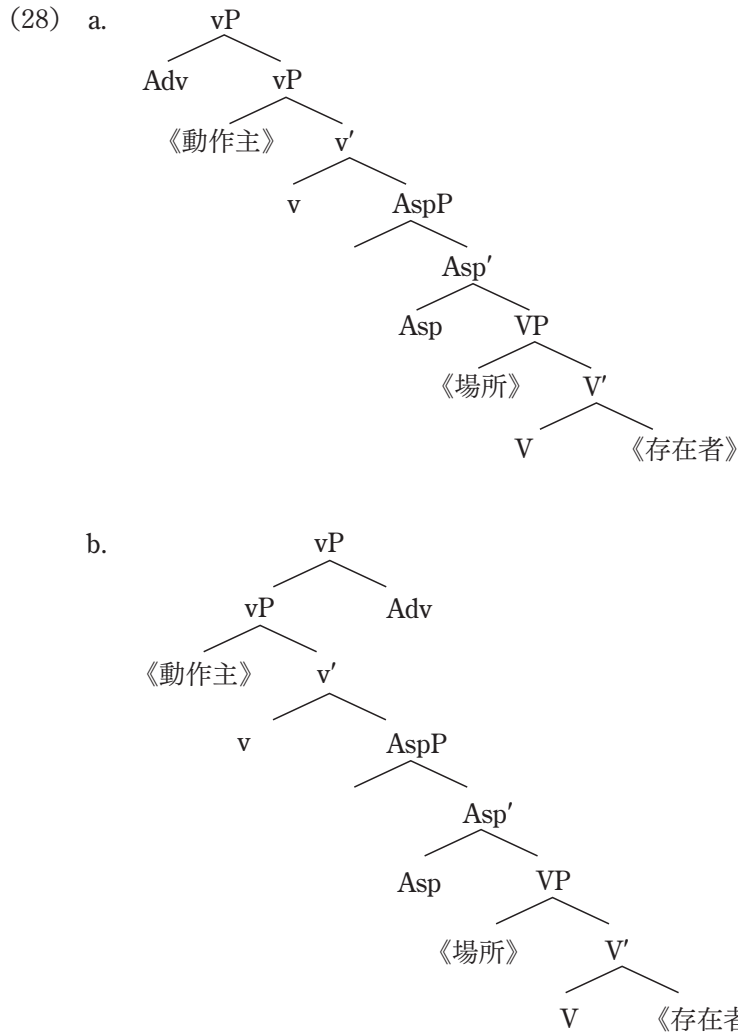
さて、《場所》の状態変化や《存在者》の位置変化の様態を表わす副詞は V の領域に付加すると仮定すると、その副詞は V'、VP のどこに付加しようとも、目的語は AspP の指定部の位置、そして動詞は v の位置に最終的に現れるのであるから、常に動詞の後ろに位置することになる。このような構造を考えることで、付加分析を認めたとしても、特別な制約を何も立てることなく《場所》の状態変化や《存在者》の位置変化の様態を表わす副詞は動詞の後ろということの説明することができる⁹。次節では動詞句修飾の副詞を具体的に検証する。

3.2. 動詞句修飾副詞の生起位置の分析¹⁰

はじめに、《動作主》の動作の様態を表わす副詞、すなわち vP 様態副詞について考察する。すでに述べたように、《動作主》の様態に関わる副詞は vP に付加するので、左右どちらに付加するかによって動詞句の前後のどちらにも生起することが可能である。(28) はその構造を樹形図で示したものである。

⁹ 二重目的語構文のように《動作主》《場所》《存在者》のすべてが NP として具現しているような場合は、(24) の構造では副詞の正しい位置を予測できない。二重目的語構文それ自体の分析も膨大になるため本論文では言及できないが、直接目的語と間接目的語の両方が格の照合などのため何らかの移動をすることを考えることで解決できる可能性を指摘しておく。

¹⁰ 本節は西村 (2016) で不明確であった点を修正したものである。



実際に次のような《動作主》ジョンの動作の様態を表わす *carefully* は動詞句の前後に生じることができる。

(29) a. John read the book *carefully*.

b. John *carefully* read the book.

(鈴木 (2014 : 77-78))

鈴木は (29) の例文の違いはほとんどなく、ニュアンスの差にとどまると述べている。このような事実から《動作主》の様態を表わす副詞は動詞句の前後に生じることができ、付加分析はその事実を無理なく説明できるのである¹¹。

しかし《動作主》を修飾する様態副詞は動詞句の前後に生じることができるといっても、COCAのようなコーパスで調査をすると、動詞の前の位置が基本と考えられるもの (*deliberately*) や、後ろの方が無標の位置と考えられるもの (*read the book carefully*)、さらにどちらとも言えないもの (*carefully write the book / write the book carefully*) があり、共起する動詞や目的語によって動詞の前後のどちら側によく現れるかは異なっているようであり、今後さらなる検討が必要であろう。

次に、《場所》の状態変化や《存在者》の位置変化の様態を表わす副詞、すなわち VP 様態副詞について

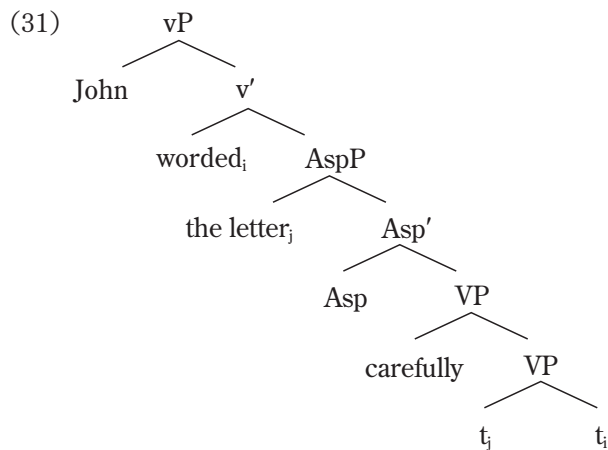
¹¹ 動詞句領域よりも上位に生じる *probably*, *fortunately*, *honestly* などの様々な副詞も、コンマ・イントネーションがあれば動詞句の右側である文末に生じることができるといえる点から右側付加は可能であるといえるかもしれない。しかし、コンマ・イントネーションが必要な理由などは今後の課題としたい。

見ていく。2.2節において、Haumann の (11) の主張は維持することが困難であることを示した。そうであるなら、(12) で挙げられているような例文が非文であることを改めて説明する必要があることになる。しかし、(12) で挙げられている副詞は《場所》の状態変化や《存在者》の位置変化の様態を表わす副詞であると考えられる。そうだとすると、すでに3.1節で述べたように、それらの副詞はVの領域に付加するため、基本的には動詞の右側にしか現れないのである。以下、(12) の例文中の副詞が《場所》の状態変化や《存在者》の位置変化の様態を表わす副詞であることを確認していく。

まずは、(12a) の例が非文であることを考える ((30) として再掲)。

(30) *John *carefully* worded the letter.

この例文において、the letter は情報を加えられて状態変化する《場所》の意味役割を担うことになる。そしてこの例文は、the letter 《場所》に加えられる情報が注意深く選択されたものであったことを表わしている。よって *carefully* はどのように情報が加えられたのか、すなわちどのように状態が変化したのかを表わしているので、状態変化の様態を表わす副詞であり、Vの領域に現れることになる。この文には明示的な《存在者》項が現れないため、Vはまずはその《場所》項である the letter と併合する。*carefully* はその後 the letter と worded の集合に付加する。the letter は目的格の照合のために AspP へ、V は v へそれぞれ移動することによって、*carefully* は動詞句の後ろ側に位置することになる。



(31) では *carefully* は VP の左右どちらに付加しても V 動詞の後ろに生起することになる。このように、状態変化、位置変化の様態を表わす副詞が動詞の後ろにのみ生起することを予測できる。

次に、(12b) の例が非文であることの原因を考える ((32) として再掲)。

(32) *The job *handsomely* paid us.

us はお金を手に入れる〈受益者〉であり、名詞句として具現する影響を受け状態変化する《場所》である。the job は意図性がないので〈動作主〉ではなく、〈原因〉と考えておくが、マクロな意味役割では《動作主》に分類されるであろう¹²。(32) の文はかなりのもうけになったという内容なので、影響・変化の程

¹² 主語が人である場合は *handsomely* が動詞の前に生起することがある。

(i) He *handsomely* paid us. (鈴木 (2014: 83))

しかしこの場合の *handsomely* は vP 様態副詞で、「気前よく」という意味であろう。

度を修飾するもの、つまりVの領域を修飾するものである。このように変化の程度を表わす完結性程度副詞は、動詞の後ろにのみ生起することが指摘されている (Haumann (2007:133))。

- (33) a. *Joe *poorly* built the house.
 b. *Laura *perfectly* cooked the roast. (Ernst (2002:224))

(33) のような例が非文になることは、本稿が仮定する動詞句構造を考えれば自然な帰結となる¹³。さらに、(12c) の例文が非文である理由を分析する ((34) として再掲)。

- (34) *Steve *elegantly* dresses.

Steve は《動作主》または服を着て状態変化する《場所》であると考えることができる。服を着るという行為の結果 *elegant* な様子になったので、変化した結果の様態を修飾しているわけであり、状態変化の意味をあらわすVの領域を修飾するということになる。よって動詞句の後ろ側に生じることになるのである¹⁴。この例のような副詞は Geuder (2000) では結果副詞と呼ばれている。実際に以下のように状態変化するものの出来栄を修飾する結果副詞は、動詞の後ろにのみ生起するという事実が観察される。

- (35) a. They decorated the room *beautifully*.
 b. They loaded the cart *heavily*. (Geuder (2000:69))

最後に、(12d) の例文がなぜ非文であるのかを確認していく ((36) として再掲)。

- (36) *She has *loudly* snored.

She は《動作主》またはいびきの音が出ていく《場所》と捉えることができるであろうが、普通いびきは意図的に行う動作ではないので、ここでは《場所》であると考えておく。抽象的にいえば、いびきの音は《場所》から出ていく《存在者》であるということが出来る。そのように考えると、*loudly* は移動していく音の様態を表わしていることになる。つまり位置変化の様態を表わしていることになり、Vの領域を修飾することになるために、動詞句の後ろ側に生起することになるのである。実際に、音や光などの放出の様態を表わす副詞は動詞の後ろに生起することが指摘されている (Schäfer (2002:313-314))。

- (37) The sun had been shining *brightly* that morning.

本節では、動詞句構造として加賀 (2001) と Travis (2010) の提案を援用した構造を導入し、その構造の中で《動作主》の様態を表わす副詞と《場所》《存在者》の変化や移動の様態を表わす副詞の生起位置を示した。次に、《動作主》の様態を表わす副詞が動詞句の左右どちら側にも生じ得ることを具体的な例を通して確認し、提案の妥当性を示した。最後に、《場所》《存在者》の変化や移動の様態を表わす副詞の例を

¹³ ここで挙げられているような完結性程度副詞は動詞句の前にも生起するという指摘がある (Ernst (2002:224-225))。Ernst によれば、動詞の意味と副詞の意味との関係によって前に生起できるか否かの違いが生じる可能性があるという。本稿では立ち入らないが、動詞によって意味役割の違いが生じることから何かしらの説明を与えることが可能かもしれない。

¹⁴ (34) の *elegantly* が、スティーブの着る動作が *elegant* であることを表わす vP 様態の副詞であればこの文は容認される。

具体的に分析し、それらの副詞の生起位置が動詞の後ろ側に制限されることを本稿の分析から導くことができることを示した。

4. まとめ

本稿では、まず2節において先行研究の概観と、動詞句修飾の副詞の分類と生起位置を見た。特にHaumann (2007)における(11)の主張について検討し、その主張を維持することは困難であることを示した。3節では加賀(2001)とTravis(2010)の提案を援用した構造を導入し、《動作主》の様態を表わす副詞については、動詞句の左右どちらにも生起できることを構造から示した。また、《場所》《存在者》の変化や移動の様態を表わす副詞に関しては、余分な制約を立てずに動詞の後ろにしか生じないことを説明できる可能性を、具体的に副詞を検討することで示した。

参考文献

- Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Baker, Mark (2015) *Case: Its Principles and and Its Parameters*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Belletti, Adriana (2004) "Aspects of the Low IP Area," *The Structure of IP and CP: The Cartography of Syntactic Structures Vol. 2*, ed. by Luigi Rizzi, 16-51, OxfordUniversity Press, Oxford.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads*, Oxford University Press, New York.
- Cinque, Guglielmo (2004) "Issues in Adverbial Syntax," *Lingua 114*, 683-710.
- Ernst, Thomas (1998) "The Scopal Basis of Adverb Licensing," *NELS 28*, 127-142.
- Ernst, Thomas (2002) *The Syntax of Adjunct*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Ernst, Thomas (2004) "Principles of Adverbial Distribution in the Lower Clause," *Lingua 114*, 755-777.
- 藤本滋之 (2014) 「主題階層、VP-shell、Split VP と諸構文の派生」日本英文学会九州支部第67回大会シンポジウム発表原稿.
- Geuder, Wilhelm (2000) *Oriented Adverbs: Issues in the Lexical Semantics of the Event Adverbs*, Ph. D Dissertation, Universität Tübingen.
- Göbbel, Edward (2007) "Focus and Marked Positions for VP Adverbs," *On Information Structure, Meaning and Form*, ed. by Kerstin Schwabe and Susanne Winkler, 275- 300, Benjamins, Amsterdam.
- Haumann, Dagmar (2007) *Adverb Licensing and Clause Structure in English*, John Benjamins, Amsterdam.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- 加賀信広 (2001) 「意味役割と英語の構文」 米山三明・加賀信広『語の意味と意味役割』第II部, 研究社, 東京.
- Kaga, Nobuhiro (2007) *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, Kaitakusha, Tokyo.
- 加賀信広 (2016) 「日本語ニ受動文における受影性の起源：意味役割理論と格配列理論からの帰結」 日本英語学会第34回大会 Handbook.
- 水野江依子 (2010) 「話者指向副詞とフェイズに基づく副詞の認可」『New Direction』28, 65-78.
- Nakajima, Heizo (1982) "The V4 System and Bounding Category," *Linguistic Analysis 9*, 341-378
- 西村知修 (2016) 「主題関係と動詞句副詞」『西南学院大学大学院研究論集』第2号, 1-13.
- 岡田伸夫 (1985) 『副詞と挿入文』大修館書店, 東京.
- Radford, Andrew (1997) *Syntactic Theory and the Structure of English: A Minimalist Approach*, CambridgeUniversity Press, Cambridge.
- Schäfer (2002) "Pure Manner Adverbs Revisited," *Sinn & Bedeutung VI, Proceedings of the Sixth Annual Meeting of the Gesellschaft für Semantik*, 311-323.
- 鈴木博雄 (2014) 『英語副詞配列論』ひつじ書房, 東京.
- Travis, Lisa (2010) *Inner Aspect: The Articulation of VP*, Springer, Dordrecht.